手を拍ち斎しく唱ふ放毬歌

二

終日乞食し罷り帰り来つて、蓬扉を掩す、炉には焼く帯葉の柴、静かに読む寒山の詩、西風夜雨を吹き、颯颯として茅茨に灑ぐ、時に双脚を伸ばして臥し、何をか思ひ又た何をか疑はん

三

索索たり五合庵、実に懸磬の如く然り、戸外杉千株、壁上偈数篇、釜中時に塵有り、甑裏更に烟無し、唯だ東村の叟有り、頻りに月下の門を叩く

四

薪を担ひて翠岑を下る、翠岑路平らかならず、時に息ふ長松の下、静かに聞く春禽の声

（中央公論新社　内山知也訳）

相馬君は、良寛上人について六、七冊書いており、上人の芸術と思想には敬服しているが、良寛が三条大地震後に友人に出した手紙は、特に面白い。「地震は信に大変に候。野僧草庵は何ごともなく、親類中死人もなく目出度く存じ候。

うちつけに死なば死なずて永らへてかかる憂き目を見るがわびしき。しかし、災難に遭ふ時節には災難に遭ふがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。

これはこれ災難を逃るる妙法にて候

かしこ」

四年前、相馬君が火災に遭った時、この手紙と一茶の蛍の句を引用し、今年はどうなることだろうと自分を慰めている。相馬君から教えてもらった良寛と一茶は、とても面白いが、良寛と一茶から糸魚川へと話を戻せば、がくりと考え込ませられてしまう。

（民国二十一年十二月二十四日　豈明　昭和七年十二月二十四日（一九三二））

細井　昌文

御風が周作人と豈明を同一人物と知らず、怪しんでいることに興味をそそられ九十年代からようやくはじまった周作人研究書数冊を読んでみた。「広辞苑」の記述からだけでも周作人が御風にいかに注目していたか知れると思う。二人は何かしら共通項が多いと思う。

「中国の作家、日本文学研究者、字は啓明、魯迅の弟。浙江省の人、日本留学後、北京大学教授となり、新文学の方向を示した多数の評論、翻訳を発表。また児童文学の開拓者。評論集『自分の園地』『瓜豆集』など（一八八五―一九六七）」

筆名は豈明のほか仲密、知堂、遐寿など多数ある。一九〇六年（明治三十九）兄樹人（魯迅）に続いて日本に留学、立教大学で古典ギリシア語と英語を学ぶ。時に二十一歳であった。

この年御風は早稲田大学部文学科を卒業し、自然主義評論家としての第一歩を印す。二十三歳。周兄弟二人が東京で過ごした数年間はちょうど自然主義が文壇で台頭し、やがて全盛時代を迎へようとした頃である。周作人の回想によれば、魯迅は漱石の作品以外、当時の日本文壇に対しては、ほとんど無関心であった。周作人は日本の自然主義に魯迅ほど冷淡ではなかった。花袋の「蒲団」を愛読したし、自然主義の文芸理論には大いに感心したと告白もしている。しかし彼は折からの文学革命運動に呼応して「人の文学」「平民文学」などの評論で白樺派風の清新な個人主義ヒューマニズムを鼓吹、同時に日本語、ギリシア語、英語をつうじて古今の海外文学を精力的に紹介した。作家としては全生涯を通じて「雨天の書」以下、約二十冊を数える随筆群を残した。また彼は日本文化の簡素、自然、人情美を愛し、とくに江戸庶民文芸を愛し、日本の書物の中で見つけた児童の生活を描いた詩文で、自分の好きなものとして、小林一茶の「おらが春」を挙げた。貧しい日本娘羽太信子と恋愛結婚、辛亥革命（一九一一年明治四十四年）直前に帰国、郷里の教育界で活動。日中戦争期間中、不幸にして北京の対日協力政権に参与、戦後、国民党政府の手で「漢奸裁判」にかけられ、南京の獄に投じられた。一九四九年、同政権崩壊前夜に釈放され、「魯迅の故家」（一九五三）のような魯迅関係の著述と日本文学の翻訳に従事、香港から自伝「知堂回想録」（一九七〇）などが出ている。しかし政治ならびに道義上の汚名はついにそそぐことができなかった。魯迅と周作人のその日本理解の落差が終生にわたる兄弟の離別という帰国後の事件に影を落としていることも認めなくてはならない。文化大革命の折には魯迅未亡人許広平から激しい攻撃を受けながら一九六七年に八十二歳で亡くなった。

周作人が日本に来た一九〇六年（明治三十九）は、中国人留学生が一万二千人とピークに達した年だった。早大清国留学生部は前年に発足して五年で閉鎖された。本科だけでも卒業生は約四百人、在籍者は二千人に及んだ。御風の眼は留学生の運命にとどかなかったのか。

〈引用参考文献〉

劉　岸偉　東洋人の悲哀―周作人と日本　河出書房新社　一九九一年

柴崎信三　魯迅の日本　漱石のイギリス「留学の世紀」を生きた人びと　日本経済新聞社　一九九九年

周　作人　日本談義集　東洋文庫七〇　木山英雄編訳　平凡社　二〇〇二年

呉　紅華　周作人と江戸庶民文芸　創土社　二〇〇五年

丸山　昇　「魯迅」その文学と革命